

はじめての歎異抄講座

1.本章の内容

第七、第八章は「信仰とは何か」をわたしたちに厳しく問いかける章です。法然聖人と親鸞聖人にとっての信仰とは、死んだらどうなるのかを解決することではなく、いのちの根源的な叫び声にほかなりませんでした。あらゆるいのちは、「みずみずしく、光り輝きたい」と叫んでいます。いのちを照らし出すのは、根源的な光でしかできない、その光に遇うことを信仰だということです。

2.「如来は光である」

親鸞聖人は阿弥陀如来を「この如来は光明なり」とおっしゃいます。光そのものであると。その光には十二の徳があると経にあります（『仏説無量寿経』）。

- ①無量光/量ることのできない光
- ②無辺光/際限のない光
- ③無碍光/なにものにも遮られることのない光
- ④無対光/比べるもののない光
- ⑤炎王光/最高の輝きをもつ光
- ⑥清浄光/衆生の貪りを除く清らかな光
- ⑦歡喜光/衆生の怒りを除き喜びを与える光
- ⑧智慧光/衆生の惑いを除き智慧を与える光
- ⑨不断光/常に照らす光
- ⑩難思光/思い量ることのできない光
- ⑪無称光/説きつくすことができず、言葉も及ばない光
- ⑫超日月光/日光、月光に超え勝れた光

これら十二の徳のなかで「③無碍光」がとくに重要視されます。なにものにも遮られることのない光とは何ものをも通してしまう光、影をつくらせない光です。その光に遇うこと、その光に包まれること、それを仏教学者の鈴木大拙は「**宗教は、光の中に包まれているという自覚があれば、それで足りるのである**」（『日本的靈性』岩波文庫）と表現しています。その、光に包まれているという自覚が難しいのですが、親鸞聖人はこうも言われています（『高僧和讃』）。

むげこう りやく いとくこうだい
無礙光の利益より 威徳広大の信をえて

かならず煩惱のこほりとけ (氷溶け) すなはち菩提ぼだいのみづ (水) となる

ざいしょうくどく たい
罪障功徳の体となる こほり (氷) とみづ (水) のごとくにて

こほりおほき (氷多き) にみづおほし (水多し)

きはりおほき (障り多き) に徳おほし (多し)

光そのものを見ることや感じることは難しいのですが、光に照らされ氷が溶けて水となるように、煩惱の氷が菩提の水、つまりさとりそのもの、信心そのものに転じられていく体験に出会う、それは光を感じたに等しいと親鸞聖人は仰せです。「如来とは光明である」。それはこの体験を通して親鸞聖人が感じた心からの声だったに違いありません。

3.いのちとは光明である

親鸞聖人は「すくい」を「摂取の光明に遇う、包まれる」と表現されました。あらゆるいのちは、光に遇うことを本質的に求めています。阿弥陀如来という方がおいでになってわたしを包んでくださるのではなく、阿弥陀如来という光明とあらゆるいのちは本質的には「同じ光明」であって、互いが強烈に引き寄せあっている、互いを見つめあっている、同化しようとしているのです。その本質的かつ根源的な部分で引き寄せあう、それはいのちの叫びです。「いのちはみずみずしく輝いている」、しかし現実としてわたしたちにはそうは見えません。いのちは深い闇に包まれているようです。

煩惱にまなこきへられて 摂取の光明みざれども

大悲ものうきことなくて つねにわが身をてらすなり (『高僧和讃』)

親鸞聖人はいのちの叫びを終生問い続け、「わたしから光明を求める」という方向性ではなく、「阿弥陀如来という光明がわたしを求めている」という方向性によって全体をとらえ、それによってのみのちが光り輝くことを本願、つまり本当の願いと受け止めていかれたお方です。これを別の言葉では「自然法爾じねんほうに」と言われ、「もとよりしからしむる」ことだとお示しです。もとよりとは、このわたしよりも先ということです。わたしよりも先に光明があって、わたしよりも先に包み込もうとしている。そのお心が「非行非善の念仏」というお言葉に結び付いていくのです。

以上